

## 長江裕芳先生を送る

著者	芝 勝徳
雑誌名	神戸外大論叢
巻	64
号	3
ページ	5-6
発行年	2014-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001655/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001655/</a>



## 長江裕芳先生を送る

芝 勝 徳

長江裕芳教授は、1978年4月1日に本学講師として採用され、本学での勤務年数は35年となり2013年3月31日に定年退職されました。私はその間およそ20年、先生とご一緒に仕事をさせていただきました。1993年当時、本学の学術情報システムの構築が担当だった私が最初の学内ネットワークの構築とそれを外部のインターネットに接続する段階で仕事をしている中で欧州原子核研究機構（CERN）のWWWサーバソフトウェアを導入することにアドバイスをいただいたのが最初である。思えば今年の4月30日はCERNその世界で最初のWebページが公開されてから20周年にあっていた。その間、インターネットは世界に今生きている人々に甚大な影響を与える社会的基礎基盤となっており、この春の長江先生のご退職のタイミングに重なり感慨深いものがある。

長江先生は我が国を代表する分子生物学者の1人であり、その研究業績は光合成細菌や植物がどのようにして太陽光エネルギーをグルコースという化学物質のエネルギーに変えるのかという問題を、クロロフィルやカロテノイド分子の電子状態や、それらの分子間の電子・エネルギー伝達機構の理論的な考察を通して研究しておられました。その専門分野を背景に本学においては、いわゆる自然科学や特に数学は少し苦手という典型的な文系学生を対象に自然科学史や東西の文明と科学の関連についてやさしくわかりやすい講義をしていただいていた。折しも地球温暖化に象徴される環境問題は現在大学において講義すべきものであり、その意味において本学は長きにわたって長江先生という最良の人材を得ていたといえると思う。

長江先生は私からみて純粋に科学者であった。夏目漱石の講演筆録「道楽と職業」の中で漱石は職業というものは人の為にするもので元は他人本位である。しかるに科学者、哲学者もしくは芸術家は自己本位でなければ成功しない。彼らにとって道楽即ち本職であると述べている。道楽とは「道を求めようとする願い」であり本来職業とは離れているところで耽り楽しむものであるが、科学者はそれが一致しているというのである。数年前に長江先生は大きな病気を患われた。先生は復帰された直後、私に症状や手術の状況、術後の経過をまるで、自分が執刀したかのように客観的に語ってくださった。おまけに、麻酔による幻視についても具体的にこんなものがこんなように見えたとお話く

ださった。普段の研究における客観的に事象を観察し、直感と知識によりそれを考察できるという能力が自分自身の生命がかかった状況においても発揮されているところにおそれいった感がした。科学の人とはこうゆうものだと。

一方、Joseph Terence Montgomery Needham の科学、産業革命、資本主義が何故東洋よりも、西洋が優位だったのかというようなニーダム問題も考えておられた。この20年さらに情報通信技術の西洋さらには1国にリードされる状況がこの問題の後に続いている。

長江先生の深い知見を語っていただいた時間も今から思えば貴重なものであった。長江先生に教わったこと中から何を追うべき課題とするかをこれからゆっくりと考えてみたい。